**なりるやなるみ**(仮名) 工学部⒊年(理科Ⅰ類出身)

私立ラ・サール高等学校卒 ２浪

親の職業…父:会社員、母:テレビ局員

得意科目…数学？

苦手科目…英語

兄弟姉妹の有無…妹１人

現役　センター680点ぐらい

前期 理一×(第一段階不合格)

後期 東工大 ×(第一段階不合格)

併願 なし

一浪 センター824点

前期 理一 ×(最低点-50点ぐらい)

後期 鹿児島大医医 ×(面接で不合格)

併願 東京医科大 ×(適正試験で不合格)

二浪 センター試験790点

前期 理一 ○(最低点+40点ぐらい？)

後期 千葉大医医

併願 慶應理工学問1 ○

慶應医医　×

本文

はじめに

初めまして。なるみやと申します。実言うと、僕は去年の東大多浪に寄稿するつもりでしたが、〆切をブッチしています。現在、再び一年越しの締め切りに追われています。学んでないですね。これぞ多浪。乱文となっているところがあるかもしれませんが、主に、無謀なチャレンジをしている最中の人へのエールになればと思って書き記しました。最後までお付き合いいただければ幸いです。

幼少時代

よくぼーっとしてると母親に言われていた。人見知りで友達はスケッチボードと計算ドリル、そして、母親の仕事の関係上、身近にあったドラマであった。ゲームは禁じられていた。友達はできるが、新しい友達を作るのは下手でそれよりもスケッチしたり、計算ドリルをこなすことが好きだった。

小学校は地方では珍しく私立に行った。低中学年の時は遊び好きで勉強があまりできない少年だった。低学年のときはサッカーが好きで昼休みによくサッカーをしていた。二年生の途中からそれが野球に変わった。アニメ、メジャーが放映され始め、それにハマったからだ。成績は悪く、それを懸念した母親から公文（くもん）に入れられた。すごく強制的に入れられたので本当に嫌々やっていた。それでも数学だけは好きだったので四年生の頃に結局微積までやった。なお、概念はよく理解してなかった。

小学校5年の冬休みの頃、中学受験対策の塾に入った。周りの人が行ってて楽しそうだったから。母親に、僕から、塾行きたいという旨を伝えた。幸いなことに母の退職金を削ることで、塾に行かせてもらえた。実際、入ってみると楽しかった。ラ・サール中学を目指し始めた。周りの友人が目指していたから。とにかく流されやすい性格だった。始めるのが遅かったのもあり、苦戦はしたが、勉強大好きだった小学生だったおかげで、なんとか第一志望のラ・サール中学校に入れた。

中学時代

中学時代は煌めきから挫折と低迷への時期だった。

僕は中学に入ったら思う存分野球をしたかった。というのも、母親から小学生のとき野球クラブに入るのを禁じられ、受験成功したら野球してもいいと言われていたからだ（この時からなり反発したが、10ぐらいの子供の力は無力だった）。というわけで、野球部に入る気満々で野球部に入部の願いをしたところ、ラ・サールの中学野球部は新入生は秋から受け付けるといわれ、入部させてもらえなかった。そのために、同じクラスにいた野球部入部希望の人と二人でほぼ毎日キャッチボールをしたり、バッティング練習をしたりしてた。そうして迎えた中学一年の9月、満を持して野球部に入ったはいいものの、まともな練習をしておらず、すぐに野球部に行く意味を見失った。そうして、学年が変わる前までまともに部活はいくことなく、入部前にキャッチボールしてた人と二人で毎朝と放課後、部活にもいかずにバトミントンをして汗を流していた。監督からも特に何も言われなかった。まぁ、こんな感じでスポーツのことばかり書いたが、このころ勉強もしっかりやっていた。成績は上位30位ぐらいだった。このまま行けば普通に浪人もせずに東大も行けたかもしれない。まさに輝いた毎日だった。まぁ、そうはならなかったから多浪してるのだけども。（余談だが、小学校の頃から英語に苦手意識があり、初っ端の英単語のテストで追試を食らった。どうしても、appleが書けなかった。）

中学２年生になると、野球をちゃんとやり始めた。というのも、野球部の監督が変わったからだ。今までの野球をよく知らない社会学の先生から、大学までしっかりと野球をしていた新卒の体育の先生へとなったのだ。それにともない、野球部は本格的に「野球部」といえる体を成し始めた。練習も礼儀も格段に厳しくなった。しかし、真面目に野球をしたかった僕にはそれがありがたかったし、嬉しかった。そうして野球にのめり込んだ小学六年生のころからいきな増え始めた筋肉のおかげで、自分は中学生の中では飛び抜けて長打力があり、また肩が強かったため同世代ではレギュラー候補であったのもあり、一層力も入った。また、それに比例して勉強もしっかりやっていた。夏までは。

中学２年の秋になりきる前の9月の時、野球で肘を骨折した。ここからは絶望の連続だった。

成長期で骨が柔らかくなっていたが、その反面筋肉が強すぎるために起こった剥離骨折だったらしい。全治三ヶ月と言われた。上の代が終わり、自分たちの代になった！力入れてやり切るぞ！ってなっている最中の怪我だった。また、この怪我をする直前の練習で肘が痛むことを感じていたため、監督に次の練習で病院に行くために練習を休んでもいいか？と聞いたところ、「練習に出ていれば治る」という、今考えてみると本当に意味不明な理由で却下され、純粋だった当時の自分は「意味は分からないけど自分が知らないだけなのだ」と監督の言葉を信用し練習に出続けた後の出来事だった。絶望を感じた。大人を信用できなくなった。しかし、三ヶ月ならば、まだ最期の夏の大会に間に合う！と思い、術後のリハビリもがんばり、片腕だけでも鈍らないようにと、逆の手で投げてみたり、野の本をいくつか読んだりしていた。…が、三ヶ月経っても肘は治る兆しを見せなかった。医者の言ってることも信用できなくなった。それどころか、左で投げていたとき、監督から影で「あいつは遊んでる」と言われたときもはや感情すら湧かなかった。絶望も感じなかった。もはや、腐るだけだった。自分が止まってる間にみんなが進んでしまう、そこに自分が加われない絶望感にはもうとっくに慣れてしまい、いつまでもしたいことができない、もしかしたら、最後の大会にも間に合わないかもそれない、そんな絶望の連続は14歳の心を簡単に腐らせた。何もする気力が起きなくなった。もちろん、勉強もやる気が起きなかった。そうして、このころ成績は急激に下がり始めた。上位30位だった成績はいつの間にか、下から30-40番ぐらいになっていた。しかし、それでもやる気が出ないものはやる気が出ない。むかしから、やらないときは徹底的にならない性格だった。

そうして心や生活が腐っていくころ、僕は漫画にハマった。きっかけは、リハビリ前の病院の待ち時間が暇だったため、試しに漫画を読んでみたところからだ。漫画は腐った生活に、刺激を与えてくれた。漫画を読んでるときだけは楽しかった。そこから僕は漫画にのめり込み、当時ハマっていた漫画「バクマン。」の影響で、ときには自分でも漫画を描いたりもしてた。少年漫画は片っ端から読み漁った。青年向けもできるだけカバーした。

また、中学3年生に上がると、アニメにもハマった。きっかけはカウントダウンtvでオリコンランキングにアニメ「けいおん！！」の主題歌が入っていたことだ。そのあと、「けいおんってなんだ？」となって「けいおん！！」を見始めたらまんまとハマった。そうして、勉強しなくなった。その上、成績のことで親から何か言われ、むしろ、勉強がうざったく感じ、ますます漫画やアニメにのめり込んだ。逃避といった方が正確かもしれない。ただ、間違いなくこの当時、漫画やアニメは僕の心を救ってくれる存在であったのだ。

余談だが、この時、遅刻も目立ちはじめた。もともと時間にはルーズな方であったが、朝リハビリに行くために学校を遅刻することが当たり前となり、リハビリのない日も遅刻して近くの書店で漫画読んでから学校行くとかしてた。ますます成績は下がった。中学三年生の時に、担任から「遅刻が多すぎて高校上がれないかもしれません」と面談で言われたのは今でも記憶に残っている。なんだかんだ、高校へ進学させてくださった先生方には今でも感謝している。

さて肘の方だが、中学三年生の秋頃に治った。「完治」はしていない。今現在でも元に戻ることはなく違和感はあるし元のように送球もできない。しかし、夏の最後の大会は無理を押して代打で出してもらった。ヒットも打てずにチームも一回戦で負け、やりきれない気持ちだけ残った。

ちなみに、あの親友とは時たま話すことはあれども、ほぼほぼ接点がなくなっていた。

高校時代

高校一年生のとき、そんなわけでギリギリ高校に上がったにもかかわらず、変わらず勉強に身のはいらない毎日を過ごしていた。高校時代のほとんどは、野球とサブカルに費やした。

宿題だって人のを写していたし、授業中は漫画やラノベを読んだり、ゲームをしていた。あいも変わらず、漫画・ラノベ・ゲームにハマってた。

一応、中3の秋から野球はできるようにはなっていたため、また懲りずに野球部に入り野球をやっていた。監督が違ったというのもある。プレイはできるが、前のようにとは行かずに、投げられる距離も強さも格段に落ちていた。野球部の練習はほぼ毎日あり、特に土日はグラウンドの広いところまで自転車で行って練習して帰ったり、バスで遠征して練習試合をしたりというものであったため、野球部に参加しているだけで時間は相当なくなっていた。だから、勉強できなかった…とは言わない。実際、部活のない時間、ちゃんと勉強して成績良かった人もいたから。でも僕は土日の練習後は時間があれば部活の人たちとカラオケにいったりひて遊び、平日は帰ったら漫画ラノベゲームや当時流行っていたニコニコ動画に費やした。（このころボカロにはまり、そっちでも時間が溶けていた）

そういえば、勉強への意識は低かったが、なぜか日本史だけは真面目にやっていた。好きだったし、教えてもらっていた日本史の先生の授業やテストがかなり面白かったためだ。その授業は、分野が切り替わる毎に先生の自作B5プリントが配られ、そこには本当に簡易的なその分野のまとめが書いてあり、数カ所空欄ができており穴埋め形式になっていた。それを配ったあとは先生がひたすら喋り倒すという授業だった。すごく大変な授業でノートをとるのにも一苦労だった。しかし、先生の話は物語長となっておりすごく面白いのだ。また、問題も小論形式で答えるようになっておりその文章作成も面白かった。試験前は日本史の対策ばっかりしていた。

高校一年の半ばごろ、文理選択の時期がきた。元々、「社会2科目やるのは嫌だから理系行こう。理転より文転の方が楽だろうし」と思って理系と思っていたので理系を選んだ。中学の頃、世界史や地理、倫理政治経済には全くと言っていいほど惹かれなかったからだ。まだ物理化学生物の方がいい気がしてた。本当に意識が低い。

理系を選んだことで、すこし進路、とくに行く大学や学部のこともすこし考えた。本当にすこしだけだけど。

医学部に行くのだけはいやだった。うちの学校は医学部進学割合がとても高く、そのため、医学部進学希望者もとても多かったし、実際に、周りにもたくさんいた。それでも嫌だった。というのも、母親やその周りの人たちが、僕に随分前から医者になるように言ってきたことへ、反発心を覚えたからだ。この世の中、医者以外にもたくさんの職業があるのに、なぜ医者しか勧めてこないのだろう。医学部に入れば医者しかになるしか道はないと思ったのそれは嫌だった。それに、周りの医学部志望者にも違和感を覚えたのだ。彼らは明確な意識を持ってそれを志望しているのだろうかと。医学部を出て医者になるのだろうが、医者というのはそのまま人の生死に直結する。そんな職業に明確な意識もなく、適当になっていいものではないと思ったのだ。医学部だけ難易度が高くまた、面接を設けているのにも少し違和感を覚えた。医学部だけ特別意識を持っているのに嫌悪感を抱いたのだ。そのため、僕は医学部には行かないという思いだけは常に持っていた。

しかし、医学部には行かないと決めてるだけで、やりたいことが見つからない。日本史は好きでも日本史の研究とか具体的にわからないし学校の先生になるしかなさそうだしってなって思ってもいたし。そんなわけで進路に悩んでいた。しかし、志望校は簡単に決まった。純粋に、どうせなら日本一と言われる大学を目指して見たくなったのだ。東京大学を。それでもはじめの頃は自分に東京大学を目指すことができるのかと不安に思ってた。しかし、そんな不安もすぐになくなった。

それは、ある日の部活終わりの帰り道、途中まで帰り道が同じ部活同期のKと帰っていたときのことだった。志望校の話になったとき、

K「そういや志望校どうする？」

僕「んー、決まってないけど、最近、東大がいいんじゃないかと思ってる。」

K「！！そうだよな、やっぱ男なら東大、日本一だよな！」

僕「な！！！やっぱりそうだよな！！！」

僕が東大を受けると決意した瞬間だ。実は人に東大を志望校にすると言ったのはこの時が始めてであった。この会話の時まで、打算的な考えとして、日本一を目指しておけば、もし東大を受けないとなってもどこにでもいけるだろと思っていたが、この会話でそんな思いもどこかに行き、東大を目指すことを心に決めた。特に(進路を決めていなくても理科I類に行けば幅が広いのも決めての一つではあったが。)

そんな感じで東大を目指すことを決めたが意識自体は相変わらず低いままだった。特に理由はない。昔から言うだけ言って行動しないことがよくあった。

高校二年生もそのまま過ごした。高校野球は高校でしかできないからちゃんとやりたかったのもあった。肘のせいで、守備に難があったため常にレギュラーは出してもらえなかったが、それでも打撃を頑張ってチーム内で一番長打を打てる人になった。また、代替わりの最初の新人戦でもチームとしていい成績が残せた。とにかく野球で生活が充実していたのだ。あとは、ラノベ漫画アニメニコ動。特にラノベにはめちゃくちゃはまり、このころ読み倒した。そんなことやってたから、結局成績は悪いままであった。下から30位ぐらいをずっとはっていた。それでも東大を目指すことは心に決めていた。そんなバカな人間だったから。また、運よく周りにそのことを否定する人があまりいなかったことも、東大を目指そうと思い続けられた大きな要因であると思う。

受験突入（高校3年の時）

学業成績は相変わらず悪いままであったが、それでも東大を目指すことは心に決めていた。そんなバカな人間だったから。また、運よく周りにそのことを否定する人があまりいなかったことも、東大を目指そうと思い続けられた大きな要因であると思う。担任の教師に志望校を伝えたときにも特に何も言われなかった。「そうか。大変だろうけど、頑張って」と言われただけであった。(当時の担任の先生には本当に感謝している。)少し横道に逸れてしまうが、東大などの難関校(というべきなのか？)の合格者を多数輩出する学校とそうじゃない学校というのはここが大きく違うと思う。別に、僕の学校の業績をイキろうとしてるわけではない。ただ、その人のやりたいことを否定することはしてはいけないと思うのだ。それが、長期的には学校の利益につながると思うのだ。

高3になり、受験生となる意識だけはあったので勉強をやり始めた。ちなみに、高3のはじめの頃の成績は本当にやばかった。どのくらいやばいかというと、駿台や河合の全国模試で平均偏差値が40台前半になるぐらいやばい。しかし、東大志望は変えなかった。勉強もしていた。

だが、全く成績は伸びなかった。というのも、受験勉強のやり方がわからなかったからだ。三年以上真面目に勉強してないので周りがやっていることがまずできない。でもとりあえず、学校の宿題ややっていることに手をつけてみるが、それも吸収できない。他の東大志望の人がやっている問題集などに手を出してみるができない。(できるはずがない。)そもそも、まず、勉強法云々言う前に、勉強の仕方さえわかってなかった。古文勉強するぞ！と意気をはき、机についてやっていたらいつのまにかに寝ていて夜になる。こんな毎日が続いた。成績上げるぞ！と思ってた夏休みも気づいたらなんの成果もなく終わっていた。夏に受けた東大模試も、全く解けず当然のE判定どころか、総合得点で100点すら言っていなかった。(※東大の理系の最低点は230点ぐらい。)

ちなみにだが、うちの高校は予備校などに通う人は少ない。いたとしても、自習室を使わせて貰うために行く人がほとんどである。と言うのも、うちの学校は学内で受験勉強までしっかりカバーするプログラムができていてそれ以外をする必要がほとんどないからだ。「週テ」と言う毎週テストのある制度があり、その難易度がそこそこ高い上に量もあるため、演習量も確保されている。もちろん、他の問題集などもやるが、そこでわからないことがあれば、先生に聞くほうが早い。そう言うシステムであったため、周りで予備校に行く人はほとんどいなかった。(自分もその風潮に乗って予備校通わなかったのは悪手だった気もしなくはないが、どうせ通っていたとしてもお金の無駄使いになりそうだったから、結果的によかったのかもしれない。)

高三の秋になると、流石に勉強をし続けられるようになったし、勉強量も増えたものの、全く成績は上がらなかった。秋の全国模試でも総合偏差値40台を叩き出していた。このころになると(と言うか、初めからかもしれないが)、浪人することを念頭に考えていた。周りの人たちも結構浪人しても大丈夫な風潮があった上に、東大以外の大学に全くもって行く気が起きなかったからだ。E判定からの合格方法とかも調べて試してみたが全く手応えはなかった。それでも、とりあえず、受験勉強はした。

受験1年目(高校三年生)

受験本番を迎えた。志望は東京大学の理科一類である。学力レベルは東大受験生としてお粗末すぎるものだった。センター試験レベルに関しては、数学物理化学社会(日本史)が9割取れるが全く安定しない、国語は7-8割は安定してあったが、英語が絶望的に悪く5割ぐらいであった。総合して8割ぐらいであった。まずこの時点で厳しい。センターレベルがこんなも飲んだから、当然のように二次試験もできない。そんな感じで本番に突っ込んで言った。

センター試験本番、一言で言うと惨敗した上に事故が起こった。1日目の最初の科目である社会、つまり日本史は高校三年間、好んで学んび続けていただけあって9割５分取れた。次の国語では歴代で最難関レベルというような問題が出て、感覚で解けてはいたが基礎力のない自分は見事に自分史上最低点を叩き出した。英語はいつものように悪かった。しかし、事件はむしろ2日目に起こった。2日目1教科目の理科で、物理・化学を解いたのだが、化学の時にマークミスで途中から１問ずつずらしてマークしていたのだ。そのことに気付いたのは、理科が終わり回収されるときに自分のマーク番号の最後の問題を見て、化学の問題冊子の表紙をみると解答範囲が、自分の解いていた番号より1つ多かったのだ。冷や汗が出た。休み時間に入って高校の同級生と話していると、２つの答えを選ぶべき場所で１つしか答えていないことがわかった。(皆さん、こういうミスをなくすために問題文はよく読みましょうね。)このとき動揺したが、一周回って次の数学は１問もミスはできないから頑張ろうと言う心持ちになったので、こう言うときの自分の精神量はすごいと思う。そんな背水の陣で臨んだ数学は致命的なミスを犯しつつもそれを最後に修正したりなど満足の行く形で終えた。後日の自己採点で結局、化学は4割ぐらいになっていた。物理は9割で、数学は9割3分ぐらいの点を確保できていた。国語の憤死、英語の爆死、そして化学の事故死で、総合的にみると完全に臨終していた。迎えにきてくれていた母親にはその当日に謝った。

依然、東大以外行く気のなかった僕は前期は東大にだし、後期はなぜか東工大に出した。(この行為は今でもよくわからない。)私立は行く気もなかったので受けなかった。

そうして、第一段階の合否発表の日、僕は東大に不合格となった。「足切り」となったのだ。こうして、僕の１年目の受験は終わりを迎えた。

実はこの足切りにもちょっとしたお話がある。実はこのとき理科二類に出していたのだ。と言うのも、各予備校の足切り点数予想で、理科一塁がかなり高くなっていた反面、理科二類は当時の点数だとギリギリ足切りにかからないものだったのだ。それで蓋を開けてみると、理二で足切りを受けた。理一の足切り点だと通過できていたのに。このとき、僕は「予備校等の予想や、判定というものを信用せずに、あくまでも自分の意思で悔いのない判断をする」ということを学んだ。

初めての受験(高校３年生時代)

高校３年生になった。部活も終わり、本格的に受験生となったが、学業成績は極めて悪かった。それでも、東大を目指すことをやめようとは微塵も思わなかった。というか、東大以外に行きたい大学がなかったという方が正確かもしれない。

一浪時代

依然、東大理一を目指していた。高３の受験で、ただ勉強してもダメだと思ったのでまず、受験戦略を立てようと思った。

二浪時代

二浪目の受験戦略は以下のようである。

この頃になると、東大受験は最早引くに引けないものともなっていた。

入ってよかった東大

さて苦労して入った東大は、僕にとって最高の環境だった。

最後に

こうして僕は二浪で東大に入った。試験を受けた回数で言えば2回だし、代表などの人に比べれば甘っちょろいものである。しかし、僕は受験の三年間、特に浪人の二年間で、とても大切なものを得た。困難に立ち向かったという経験、心が折られようが夢を目指し続けるメンタリティ。かけがえのないものであると思う。

二浪のとき、東大目指しても、未来はわからないし、不安になった日もある。それでも諦めずにやり続けたから今がある。「そんなこと言えるのはお前が成功したからだろ」という人がいるかもしれない。たしかにそれは正しい。受験なんて結果論で、受かったものが正義だ。僕だって東大に入れてなかったら劣等感に追われる人生となっていたかもしれないと思うこともある。

でも、それでも、困難に立ち向かってそれを越えようとした、また越えようとしているというその経験が、人生にとって大きな財産となると思う。ソースは僕。

（受験不要論がある。たしかに、大学受験のそのいびつな制度には疑問に思うことがある。しかし、ものごとどう考えるかでいいようにも悪いようにも捉えられる。せっかくの経験なのだからいいように使ってしまおう。そっちの方が建設的だ。）

だから、今、困難な夢に向かって心折れそうになりながらも頑張っている人に伝えたい。もう納得したらならやめればいい。でも納得してないなら、納得するまでやり遂げてみよう。納得できるまであと少しだけ頑張ってみよう。きついのであれば、「休んだっていいさ、また前に進むなら」。そうやって少しずつを積み上げていけば、多少の自信もつくのではないだろうか。

僕は浪人したことで多少人生に誇りを持てるようになった。多浪してよかったか？という問いには正確に答えられないが、多浪してまで東大に来てよかったか？と問われれば、答えはYESに決まってる。

最後に…、今までただの多浪が生意気に語ってすいませんでした！